

ヘブル人への手紙

この手紙の著者は不明でパウロか

あるいは彼の同僚であるバルナバかアポロかもしれないと考えられてきましたが
確かなところはわかりません

2章を見ると著者はイエスのそばにいた弟子たちと

直接つきあいのある人物だったことがわかります

ですからこの手紙は使徒たちの教えにしっかりと根差したものだと言えます

またこの手紙は誰にあてられたのか

そしてどこに住んでいる人に宛てたものなのかすらわかりません

ただ著者は彼らのことを良く知っていて彼らが旧約聖書なかでも

聖書の最初の5書であるトーラーに精通していることも知っています

つまりアブラハムの子孫がイスラエルという国になり

モーセがエジプトで奴隷にされていた民をシナイ山に導き

そこで神からトーラーを与えられ神と契約を結び幕屋を建て祭司が犠牲をささげ

約束の地に向かうイスラエルの民が荒野をさまよったというストーリーです

著者は読者がこのストーリーの詳細を良く知っていることを前提としています

そのことから読者はおそらくユダヤ人のクリスチャンであると思われ

それがこの書の名前の由来でもあります

10章からはこの教会がイエスのゆえに迫害を受け投獄される人もいたとうかがえます

ある者はイエスから離れ信仰さえも捨ててしまっているようなので

それがこの手紙が書かれた目的と構成についてのヒントをくれます

まず短い導入のあとにイエスとイスラエルの歴史の中で鍵となった人々や

出来事との比較を行っている4つのセクションがあります

はじめは御使いとトーラー

次にモーセと約束の地

その次が祭司とメルキゼデク

そして最後が契約における犠牲のささげものです

著者はこの比較の中で2つのことを語ろうとしています

一つ目はイエスが誰よりも何よりも優れた方であり

信頼し自分をささげるのに値する方であるということです

そして二つ目は迫害に負けずイエスに対して誠実であり続けるよう読者に促すことです

ですから著者はすべてのセクションにおいて

イエスから離れないようにと警告しています

ではその詳細を見ていきましょう

まず冒頭からイエスの偉大さについて語られています

神は昔さまざまな方法でイスラエルの先祖たちに語りかけられましたが

この終わりの時代には御子にあって語られます

著者はここで

神がイスラエルにご自身を現わされたどんな方法よりも

イエスは優れていると言っているのです

そしてイエスは神の栄光の輝きであり

神の本質の完全な現れであるという驚くべき宣言をしています

これはイエスと神の間に限りなく大きな同一性があることを示しています

神が太陽であるならイエスは日光なのです

神が刻印ならイエスは蠟に映った印の跡なのです

著者の見解ではイエスを抜きにした神はありえないのです

イエスは神であり御子として人間にられました

この手紙の残りを通してこのイエスの偉大さについて解き明かしていきます
最初のセクションで著者はイエスを御使いと比べていますが
なぜ御使いと比べる必要があるのでしょうか
申命記 33 章 2 節に基づくユダヤの伝承では
シナイ山でモーセに与えられたトーラーと神のみことばは
御使いによって届けられたと言われていました
ですから著者はイエスが御使いよりすぐれた方だということによって
イエスとイエスの良い知らせは先に語られた神のすべての
メッセージに勝っていると伝えているのです
最初の警告の根拠はここにありますが
イスラエルが御使いを通して与えられたトーラーに注意を払うべきなのであれば
神の御子によって語られたメッセージにはどれほどの注意を払うべきでしょうか
またそれだけでなくイエスが御使いより位が高いことを考えると
イエスが人間になり苦しみを受けて死ぬためにその位を放棄したのは驚くべきことです
イエスには神のもっとも輝かしい栄光と人類の悲劇的な運命に
あわれみをもって寄り添ってくださる最大限の謙遜があるので
3 章と 4 章で著者は荒野を通してイスラエルを導き幕屋を建てたモーセより
イエスのほうが大いなる方であるということに論点を移しています
イエスもまた神の民を導くリーダーですが
彼は幕屋だけではなくすべてのものの創造者でした
それから著者はイスラエルの民が荒野でモーセに反抗し
神が約束の地で用意して下さっていた安らぎを失ったことに言及します
ここで第二の警告があります
イエスがモーセより大いなる方ならそのイエスに逆らった時の報いはどれほどでしょうか
私たちもまた荒野のような環境にいて
将来神の新しい創造と安らぎに入れるのだと信頼しなければならないのです
ですからイスラエルのように荒野で神に逆らい
神の新しい創造に入れていただけるという恵
みを捨てないように肝に銘じなければなりません
次に 5 章から 7 章では
著者はイエスをアロンの血筋のイスラエルの祭司と比較しています
祭司の役目は神の前でイスラエルを代表し罪を贖う犠牲をささげることですが
著者は祭司たち自身が罪ある者たちなので
彼らは民のためだけではなく自分たちのためにも
犠牲をささげ続けなければならないと指摘しています
彼らがささげる犠牲だけでは不十分でその欠けを満たすのがイエスだと言っているのです
イエスは究極の祭司ですがアロンの家系ではなく
むしろアブラハムのストーリーに登場する
古代エルサレムの謎に満ちた祭司メルキゼデクのような祭司です
詩篇 110 篇にもダビデの家系から出るメシアなる王は
メルキゼデクのような祭司になると書いてあります
著者の言いたいことをまとめるとこうなります
イエスは究極の祭司また王でありなんの罪も落ち度もなく永遠に人々の救いであり
他の何ものにも勝る神と人との仲介者であるということです
そのイエスを拒むことは
人に与えられた最良にして唯一の神と和解する道を拒むことになるので
絶対にしてはならないと警告しています

そして最後に 8 章から 10 章でされている比較を見てみましょう
著者はイエスの十字架での死は究極の犠牲であり
神殿で奉げられるすべての動物の犠牲より優れていると説明しています
動物の犠牲は日ごとにまた年に一度宥めの日に繰り返し奉げられなければなりません
しかしイエスはただ一度ご自分をささげられ
それでこの世界のすべての罪を贖うのに充分だったのです
だからこのイエスから離れ去ってはいけないと著者は警告しています
それは神の恵み深い赦しに背を向けることになるのです
どうしてそんなことができるでしょうか
イエスの犠牲こそ預言者たちが語ったすべての罪を赦す新しい契約の土台であり
それにより赦しへの道は今も開かれているのです
このように
著者はさまざまな対比を通してイエスの偉大さを示しましたが
最後のセクションではイエスに従うようにと強く勧めています
私たちはイエスの中に神のみことばを見出し
新しい創造への希望を抱くことができます
イエスは人類にとって永遠の祭司であり完全な犠牲のささげものなのです
私たちは聖書に見られるすべての偉大な信仰の先輩たちをお手本とし
イエスに誠実であり続けどんな困難や迫害にも負けずに
神はご自分の民を決して見捨てないことを信じなければならないのです
これが著者としては短くまとめたつもりの手紙の基本的な流れです
そしてこの書を読むにはいくつかのコツがあります
著者は旧約聖書から頻繁に引用しているので
その箇所は参照箇所を開いて元の文章をその箇所の文脈の中で読んでみてください
どういう意味か分からないこともあるでしょうが
多くの場合参照箇所を開いて初めて気づく驚くような
繋がりを発見できるのでやってみる価値があります
またこの書にある警告は読者をハッとさせるかもしれませんが
それこそが大切な点です
これらの警告は読者をおびえさせるためではなく
イエスは本当に素晴らしい方なのでその方を拒むのは愚かだと教えるためなのです
それはこの書の目的と結びつきます
つまりイエスは神の愛とあわれみの究極の現れであると教えることです
これがヘブル人への手紙です

【要約】

この手紙の著者は不明で、パウロ、バルナバ、アポロなどが考えられています。手紙の宛先や著者についての確かな情報はありません。著者はイエスの直接の弟子たちや使徒たちと接触し、旧約聖書のトラーナーに精通していることが分かります。読者はおそらくユダヤ人のクリスチャンであると思われる、この書の名前はそれを反映しています。

手紙はイエスの信者が迫害を受けていた時期に書かれたもので、一部の信者がイエスから離れたことが示唆されており、その理由と構成についてのヒントが提供されています。

著者は手紙全体を通じて、イエスの偉大さを説明し、イエスが神と一体であることを強調します。また、イエスは旧約聖書の多くの要素に関連しており、祭司や犠牲といった要素を超越していると説明します。手紙はイエスへの忠誠を強調し、イエスを拒むことは神の恵みを拒むことであると警告しています。